
最強の神と、ある意味最強になった一般人の物語

オレンジ！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強の神と、ある意味最強になった一般人の物語

【Nコード】

N8249R

【作者名】

オレンジ！！

【あらすじ】

ある意味最強の能力を手に入れた一般人だった少年がドールという謎のゲームに選ばれて最強の神と旅をする！

Part 1：旅立ち（前書き）

2つ目です。相変わらず文が汚く、更新が遅いですが頑張っていますのでよろしく願います。

Part 1：旅立ち

「うっ…、よく寝た！」

とか言って爽やか(?)に起きた

俺は”クライヴ・オルグレン”。

この世界ではよくいる一般人だ。

昨日も今日もそして明日もただの一般人——のはずだった。
しかし、それは昨日の出来事だった。

「やあ」

唐突に現れた奴の名前は”無い”らしい。

当然、”ナイ”さんということではない。

「君はドールに選ばれた。さあ、旅立とう！」

「ちよつと待て。無理だ」

「なんで？」

「大体名前が無いとか怪しすぎる」

「だって神だもん」

「……………は？」

「いや、だから神なの」

（もしこいつについていけば、ラクできるかもしれない!!）

「仕方がない…いくか。」

「やった!!!」

「ところであなたの名前は？」

「クライヴだ」

「クライブっ」と

そう言っただけ神はメモを取ったが…

「ブじゃなくてヴなんですけど!!!!」

こうして俺と神の旅が始まった。

Part 1：旅立ち（後書き）

本当は「勇者と魔王」の続編を書こうと思ったんですが、思いついたんで

これを書いていきます。

Part 2：訓練のはずが…

辺りに何も無い緑の草が生い茂った草原。
そこを歩き、進んでいた。

すると、いきなり神が話始めた。

「ドールっていうのは”神が人間を１人選び、選ばれた者たちを戦わせていくゲーム”ね。」

ちなみに私は最強の神…、いや女神だけど」

（嘘くせえ…）

そして神は話を続けた。

「そこでよ、クライブ。「クライヴです」…。神は種族を作ることができるの。多くて月に１体なんだけど、あなたの戦闘用に作ってあげる！」

（いらない…）

「現れよ——エイリアル！」「エイリアン？」違う！」

するとエイリアルと呼ばれた生命体が出現する。

「っておい、俺は？」

「何？」

「武器だよ、俺の武器は」

「言っの忘れてた。超越^{トランス}よ」

「トランス？」

「まあ、エイリアル相手に使ってみて」

「仕方がない…トランスっ！！！！！！」

青いオーラが俺を包む。

そして走る。瞬きよりも速い速度にエイリアルの目が追いつかない。
さらに俺の走った後にできた突風で何体かは吹き飛んだ。

俺は一体一体の傍により殴り、蹴り、そして投げる。

その威力は凄まじく、人間の２０倍はあった。

当然一体一体確実に倒していく。

そしてとうとう残り一匹になった。

こいつだけが他のエイリアルエイリアルの3倍の大きさ、人の4倍はあった。

タイミングが悪く、俺を包んでいたオーラが消えてトランスが解除されてしまった。

「くそっ、トランス！」

「あーあ、エネルギー切れね。」

神はそう言ったが助けはしない。

エイリアルが飛びかかってくる。避けきれず掴まれ、投げられた。岩に頭をぶつける。ぶつけたところから、トマト色の某液体が溢れ出す。

俺は”この小説に残酷描写指定は付けたくないな”……いや違った、俺ももう終わりか”と置いていた。

「リアルは標的（もちろん俺）に狙いを定め、ビームを放った。ビーム撃てんのかよっ！！！！！！」

俺はつつこみだけは元気に言ったが、すれすれで避けていた。しかし、2発目は避けられなかった。

ビームは直撃し、俺はぶっ飛ばされた。

そして3発目：運良く外れた。

しかし、俺もいずれ殺やられるという事は分かっていた。

4発目：俺は転がって避けた。

しかし、エイリアルはビーム攻撃を止めて突撃してきた。

俺は直撃して、

[illegible]

崖の下へと落ちていった。

Part 2：訓練のはずが…（後書き）

オレンジー！です。

あとがきはできるだけ書いていこうと思っています。

誤字脱字や文法の問題は指摘していただければ、出来る限り修正しますのでもしく願います。

Part 3：トランサー

「こ……ここは？」

俺は死んではいなかった。

「元の場所ですよ」

神が答える。

「神！？まさか俺は天国に？いや、地獄！？」

「元の場所って言ってるでしょ！」

「そうか。でも何で生きてんの？俺」

「死にたいんですか？まあ何でもいいです……」

核心から言つとあなたは昨日―私と契約したその時―から不死身ですよ」

「……へっ？」

神は話を続ける。

「あなたはトランサー以外の者の攻撃では死に至ることはありません」

「トランサーで何だよ」

「話すと長くなりますが、――」

端的に話せよ。という俺の心を神は無視する。まあ聞こえないだろうが。

「私はドールへの参加者を探しにこの世界―エクアラロディア―にやってきた。」

そして参加者候補の15480番目。それがあなたね。

で、ドールに参加する神を”ドラー”と呼び、

参加する人間を”トランサー”と呼ぶ。トランサーはトランスを使用でき、

あなたみたいに半不死身になる。そしてトランサーの中で戦い、最後に生き残った者が、

願いを叶えられる。神はドールの結果により位付け^{ランク}される。分かった？」

「分かりました。」

「おや？トランサー反応！敵です。」

すると草原の遠くかなたから、人では実現できないであろう凄まじい速さで急接近している物体（もちろん人間だが）が一体見えた。

「消える。我が餌よ」

「エサ？ちげーよ、俺はお前の死神だつ！！」

俺は地面に落ちている小石を投げた。

トランサーを貫通し、近くに落ちた。

トランサーは倒れ、心臓の位置から某液体を吹き出しながら話した。

「馬鹿な！！何故だ」

「理由は簡単だよ。お前が異常な速さでこっちへ来たが、途中には小石がお前に向かって飛んでいた。

見方を変えれば小石が異常な速さでお前に接近したのと同じ。

つまりは自滅行為」

しかし、話の中盤にはこのトランサーは死んでいた。

「ん？」

俺に新たな力が加わった気がした。

「トランスアタック。トランスを解除する代わりに敵に必殺技的ダメージを与える」

知ってか知らずか、神はそういった。

「ドールでは一戦勝つことに新しい能力が手に入る」

「そういえばエイリアルは？」

「戻しておいたわ。放置は危険すぎるでしょ？」

「そうだな」

その時、俺は油断していた。迂闊うかつだった。
真後ろにエイリアルがいたんだから。

「うがあっ！」

「やべえ！トランス！！」

そして、横に避ける。

「トランスアタック！！！！！！！！！！」

光が発射され、エイリアルが跡形もなく消しずみになった。

「教えて下さいよ、神様」

「ごめん、つい面白かったから！」「おい」「」

Part 3: トランサー (後書き)

話の切り方がどうしても微妙になってしまいすごく中途半端なのですが、

気にしないという方向で見えていただければと思います。
修正などではできるだけ”活動報告”に書いていきます。

Part 4：自己紹介？（前書き）

残念ながら、今回は本編ではありません。

なのでPart 2から（本編）1話1000文字目標にしていきますが、

今回は完全無視の方向で。

Part 4：自己紹介？

俺はクライヴ・オルグレンだ。

偉そうに言ってるけど実は高校生だったりする。

生まれはエクアラロディアの第114地区。

（現在0～9000万地区くらいまである。ちなみに0地区は王都で、

家賃にして月700万エルくらいだ）

括弧で出たエルだが、500エルで文庫本1冊程度だ。

この星全体がエクアラロディアという1つの国によって支配（というのか？）されている。

まあ、政治も何もかも地区ごとなので実質地区＝国のイメージだが。そして神についての情報。

「神様！」

ここからは私が話を進めます。

私は前回のドールの優勝ドローラーです。

つまり最高位なんですけどね。

トランサーはグレン。由来は紅蓮ではありませんよ。

この辺重要、テストに出ます。

「出ねえよ！」

クライヴが何か言ってるので真面目に進めますか。

では、”教えて神様、Q & A”のコーナーですっ！

Q：性別は？

A：言ったはずですが、女です。

Q：年齢は？

A：そういう事は聞かないのがマナーです！

Q：いつから神様？

A：生まれた時から！

…つまんない！！！！！！！！

ノリノリでやったけれど、全然面白くないじゃない！

Part 4：自己紹介？（後書き）

1 エル＝1 円の感覚で読んでください。
やっぱり締めが微妙…

Part 5：暴走！！

「敵反応！」

「早いな。」

今度は――

「でもどこだ？」

上からだった。

「な――」

茫然としている俺に人間が剣を振り下ろす。

（トランサーじゃないのか）

「トランス！」

瞬殺した。

「金目の物は？」

「ひいつ！ありません！」

「じゃあ、消えてなくなれ。トランスアタック！！！！」

敵は消滅した。

「やりすぎでしょ！！」

神はそう言いながらも楽しそうだ。

「でも”トランスアタック”はエネルギー消費が激しいから、

多用はいけないよ――って、早速トランサー反応！！」

「トランス！ってあれ？」

俺とした事が、またもやエネルギー切れ。

「やあ」

トランサーが現れた。ていうかどこから出てきた、ここ草原だよ？

隠れる場所ないよ？…結論：影薄い

「俺の名はアーネスト。で、俺は戦いは好きじゃない。「じゃあ止

めろよ」話聞け！

そこでだ。降参しろ。「やだ」即答かよっ！！じゃあ覚えておけ。

アーネスト…それが貴様を殺す奴の名だ！！！！トランス！」

俺と同じく青いオーラがアーネストを包む。

どうやら皆青いらしいが。

「うおらっ！」

アーネストが遅い代わりに重い攻撃を繰り出す。

おそらく一発当たったが最後だろう…

しかし、トランスなしでトランスサーと戦うのはさすがに辛い。

「とうっ！」

……そして。

96 発目

「はあはあっ！」

あきらめるよ…と思ったが当然やめない。

97 発目

「ぐおおおおっ！」

とうとうだった。直撃。くりんひつと。くりていかる。

気絶した。

だが……

「何で生きてんだよおおおおっ！！！」

「勝ったのよ」

それは分かる。

「トランスオーバーよ」

「オーバーじゃ駄目なのか？」

「あなた自分の名前はヴって主張するのにこれはバがいいの！？」

まあおいとくけど。で、トランスオーバーは、——」

「直した！」

「どっちがいいのよ！で、トランスオーバーはいわゆる”暴走”のこと。」

威力は通常の1000倍はある。あいつはもちろん瞬殺されたわ。

でも、トランスオーバーは発動するか分からない。

今回は奇跡の勝利よ」

「ずっと草原にいるのもなんだし、都会へ行こうぜ」

こうして2人は第265地区へと向かった。

するとどこからかアナウンスが聞こえる。

” たった今、1回戦が全て終了しました。残り約1000万人です。

”

…俺、2人倒したんですけど？

「あ、言うの忘れてたけど、” スーパートランス ” が新たに加わり
ました」

「効果は？」

「通常のトランスの10倍の力を発揮できます」

そして歩いて行くうちに第265地区が姿を現した。

P a r t 5 : 暴走！！（後書き）

この作品は一応毎日1つが目標ですが、無理っぽい気がします。
ということ、不定期連載になりそうです。

Part 6：再び脱線（前書き）

今回もPart 4と同じく本編ではないので文字数は気にしないで書きます。

Part 6：再び脱線

クライヴです。

今回もまたまた脱線してpart 4の補足をしたいと思います。えっと前回、トランサーが残り約1000万人とってましたが人口の1パーセント未満です。決して”人口の大部分が”等という事はありません。

恐ろしすぎです。で、総人口は9兆人くらいです。地区ごとの人口のばらつきはほとんどありません。

作者です。

惑星の大きさは地球の2万倍、科学の発達は地球と同じかそれより少し遅い程度です。

神です。言う事ありません。

「ないのかよ！」

Part 6：再び脱線（後書き）

文字数を気にしないのはいいけど、少なすぎた…

Part 7：旅人希望

＊＊作者 サイド＊＊

第265地区は、東京をエクラロディアに丸々移したような都市だった。

＊＊クライヴ サイド＊＊

「ここかあ…」

見たことも無い建物が等間隔に並べられていて木々の姿はほぼ見えない。

ちなみに、番号の若い地区ほど近代化しているわけではない。

ていうか256でこれなら、114地区（俺の故郷）はどうなるんだ…。

というわけで、早速買い物に行きました。

神様は他の人にも見えてます。まあ、特殊な服装じゃないからいいけど。

俺が買ったのは拳銃ですね。警察が持つてるアレ。

で、神様は…まだ色々買いまくってます。

紙幣を作るなんてずるい！

すると、いきなり知らない人が近寄ってきた。

不審者？撃つよ？

しかし、違ったのであった。

「もしかして旅人さんでしょうか」

”旅人さん”で。

「まあ、そうだが」

「！！ 連れて行ってください！」

「へ！？」

「旅人に憧れているんです！お願いします！」

「いいですよ」

「神！いつの間に！？」

「かみ？」

旅人希望が首をかしげる。

「あああ、いやこれはなんでも——」

「私の名です」

「随分変わっていますね。」

で、よろしくお願いします！僕はディーンと言います」
こうして旅人希望のディーンが加わったのであった。

第256地区を旅立ち1時間と数分後だった。

「トランサー反応」

神が事務的にそう告げた。

「果てろおっ！」

敵は俺がトランスをする間もなく剣を振り下ろした。当然トランス状態で。

当然死んだと思ったその時だった。ディーンが前に飛び出て、

「危ない！！」

剣を白刃取りで剣を止める。

「へ？」

そして、蹴りを放つ。

それは生身の人間が出来る技ではなかった。

トランサーは遥か遠くまで吹っ飛んで盛大に某液体を吹き出し、逝った。

「嘘だろ！？」

「ガードマン警護人としては役立ちますので」

敵じゃなくて良かった…。

そして日が落ちた。

「ここで泊るか」

とは言っても何も無いが。

俺達はテントを張り、夕食を作り、寝袋に入りて夜を過ごした。
そしてただ一人、ディーンのテンションの高い夜だった。

次の日の朝…。

どういう流れか、俺 対 デイーンの練習戦を行うことになってしまった。

ああ、神様仏様どうか御助けを——って、神ならいるんですけど…。
ていうか、神様。猛烈にデイーンを応援すんの止めてくれませんか？…
そして俺対デイーンの戦いが始まった。

Part 7：旅人希望（後書き）

あとがきのネタが無いのでパスします…

というわけにもいかないのですが、パスします。

（あとがきを楽しみに待っていてくれる皆様。大変申し訳ないと思います。一言で言います。ごめんなさい）

Part 8：敗北と優勝者

「スーパーランス!!」

通常よりも一回りオーラが増す。

「行くぞっ!」

そう言ったのは、ディーン。ディーンは蹴りを放つ。

俺がジャンプして避けたが、ディーンは続けて正拳突きを放った。

俺は避けきれず、俺自身の腹にめり込んだ。なぜか時間差で俺は10メートルぶっ飛んだ。

そして俺は反撃を始める。隙をうかがいつつ、拳を入れる。

しかし埒が明かなくなった。

「トランスアタック!!!」

光がディーンを包む。と思いきや、ディーンはそれを超える速度で移動し

俺の前に現れガードする時間も与えず、蹴った。

俺は某液体を噴きながらどこか遠くへ飛んでいった。

そしてディーン>俺になったわけだが…

2時間後。

「ぐふっ、げほっ…」

俺はもといた場所へと生還した——というかトランスー以外にはとどめは刺せないが。

「さあ、行きましようか……てトランスー反応」

「……え?このタイミングで!?

「トランスアタック!」

俺は光に包まれた。

終わった——そう思ったその時。ディーンが身代わりになり受けた。

「ぐああああっ」

しかしまだ立っている。

青いオーラが突然現れ、スーパーランス時の数倍に匹敵する大きさにまで膨張した。

もちろん瞬殺した。

ディーンに駆け寄る。が、神が回復魔法で癒してくれたので大丈夫らしい。

「じゃあ、次はどこへ行くんだ？」

俺の問いに神が答えた。

あそこはエクラロディアー、治安が悪い地区だ。

「待ってくれ、君たち」

「トランサーだよな？」

そして男は話を続ける。

[illegible]

グレンが剣を抜く。

グレンはトランスを二重がけした。

フランスの力が剣にも及び、青いオーラを纏っている。

全てが一撃で逝く攻撃だろうという事は俺にも分かった。

「トランスムーブ」

グレンは俺の背後に回った、そして振り向く前にとどめの一撃を放った。

しかし俺は振り向かず前に回避した。すれすれで俺の背中に当たる。

某液体がじわりと出て流れる。

しかし、俺は前のトランス戦で加わった能力を使っていなかった。

Part 8：敗北と優勝者（後書き）

タイトルのネタバレ感はおいといて下さい。（分かっています、申し訳ありません）

今回もあとがきのネタが無い…

Part 9：地下都市を目指して

「トランスソード!!」

必殺の剣を呼び出すと、剣はグレンに突き刺さった。

「ぐはっ」

おなじみの某液体を大量に噴出し倒れた。が、

「トランスヒール、トランスムーブ」

一人で勝手に治癒して一人で逃げた。

「危ねえ…」

奴が本気で無い事はすぐに分かった。

倒そうとしていないことも分かった。

俺に何かを伝えようとしていた…。

神 サイド

自分で新技に気付くとは。

上達したわね…

作者 サイド

そして2人は新たな仲間の加入など当然知らないのだった。

クライヴ サイド

すると誰かが話しかけてきた。

なんていう昔話のような展開は無く、9999地区に着いた。

そこでは運転手がヘルメットなしのバイクをもう何回も見た。
銃は持たないとやられるような場所だ。

で、一人の少女が弓矢をぶっ放し、成敗(！?)していた。

「…何やってんの？」

「分かるでしょ！？自己防衛よ」

「じゃあ逃げろよ」

「……」

「連れてつてよ」

「何言つてんだよ」

すると神が口をはさむ。

「いいよ」

「…神様？」

「メンバーは多いほうがいい！」

「嘘だろ？…」

みたいな展開で少女が仲間になった。

「アリシアよ、よろしく」

パーティ多いな…とか思いつつ9999地区から脱出した。

無法地帯ってことで、ボロい車をひたたくて乗っていった。

車はボロかったが、10人は乗れるトラック並みの大きさだった。

所有者は激怒していたが、富裕層みたいだったからいいだろう。

「いや、これは快適」

で、なんで神様が運転してるんですか！？

すると、その2倍の驚きが待っていた。

1分後、俺が見た景色は空だった。

——そう、車が飛んでいたのだ。

いっときゃん ふうい！ もはや飛行機っ！

おっと、キャラ違い…。

「次はどこに行く？」

俺の問いに神が答える。

「19765地区！」

19765地区は”世界一深い街”で有名だ。要するに地下都市。

じゃあ飛ぶなよ！ とつつこみたいが、考えがあるのだろう。

「なんで飛んでるんだ？」

当然の質問がディーンから出た。

「間違えた！！！！」

神様、しっかり……

そして神の魔法により、モグラのように潜って進んでいった。
すると。

「トランサー反応」

またかよっ！！しかもここ！？

現在俺はグレンを除いて3人のトランサーを倒しているが…桁違いにオーラが強い！

そして地下での攻防戦が始まった。

Part 9：地下都市を目指して（後書き）

活動報告でも書いた通り、ミスの指摘や助言はぜひお知らせください。
待ってます！

Part 10：仕返し

「スーパーランス!!」

俺も最初から全力を出す。

しかし、それでもオーラでは勝てない。

すると空洞に出た。

俺は車から飛び降りると、自身の隙を埋め、敵の隙を窺う。なんと、車は先に行ってしまった！が気にしない。そうじゃないとやってけない気すらする。

アリシア サイド

神様って残酷だ……

クライヴ サイド

「うがあっ」

斧を振り回す。当たったら一撃KOかもしれない。

しかし命中率50%。あれ?…

少し考えて気付いた。

当たるじゃん!!!!!!

という訳で俺は一か八かの賭けに出た。

「トランス、トランス、トランス!!!!!!!!!!!!!!」

なんと、トランス三重がけです。

これには相手もびっくり。

「バーカ、エネルギーがなくなるぞ〜!」

しかし、成功していた。3倍ものエネルギーに膨れ上がる。

「……馬鹿な!!」

焦った敵が斧を振り下ろす。

俺はそれを片手で握り、砕いた。

さらに蹴りを一発入れると、壁を貫通しどこかへ消えた。

——はずもなく、某液体をまきちらし逝った。

「4つ目の能力、トランスムーブ」

つまり瞬間移動。

早速それを使い、神たちのもとへ向かった。

＊＊神 サイド＊＊

「ふう。」

3時間前、私たちは地下都市に到着しました。

クライヴがいなかったので3人で街を探索していました。
そして今。

「うあああああああああ」

クライヴの叫びです。

ここは崖だったので、運悪く落ちてしまいました。
ざまあ…なんて言わずに魔法で助けてあげました。

＊＊クライヴ サイド＊＊

まさか崖にいるとは。おかげでひどい目に遭ってしまった。

で、今いるのが、地下都市・19765地区の城だ。

つて、城壁削ってるやつがいる！！！！！！！！！！

持っていた銃で撃ちぬく。

某液体が飛び散り絶命する。

すると、周辺住民が驚愕の表情で俺を見る。

中からお偉いさんのような人が出てきた。

「ありがとうございます」

「でも、あの人たちが驚いてたよ」

「ここは科学が発達していないので拳銃なんてごく一部の人が知らないんですよ。」

まあ、幸福に暮らせていますけど。

あと、私は富裕層とかお偉いさんではありませんよ。

ごく一般の市民です。一応優劣は無い事になってます。国王を除け

ば」

事情を説明してくれた。

しかし、背中が妙に生温かった。

足下には某液体が。

「馬鹿な……」

俺の背中には斧が突き刺さっていた。

「確かに倒したはずなのに」

意識が遠のく。

「おい、神……。こ……はやば……。ね……。！？」

おそらく、”おい、神様。これはやばくねえか！？”とでも言ったはずの

ディーンという言葉すら聞き取れない。

そして倒れた。

Part 10：仕返し（後書き）

いよいよ10話が過ぎました。

しかし：4月からは更新ペースが著しく落ちる見通しです。

読者様には大変申し訳ないですが、”そこを何とか！”という気持ちです。

ですが、遅くてもきちんと完結まで持っていくつもりですので今後ともよろしくお願いいたします。

Part 11：グレンの話

＊＊デイン サイド＊＊

背後から何者かに襲われ、気絶——いや死んだのか？——したクライヴ。

「あらあら。クレイヴも撃たれ弱い！」

これを言ったのはアリシアさんじゃないです。神様です。

そして神様は続けました。

「あなた。もうトランサーじゃないわよ」

「ハツタリを言うな。大体トランスすれば——なっ！……！」

神様の予想は的中していました。

「でしょっ。だって一度死んだんだもの。」

それに、「それに？」トランサーは半不死身よ。

今やトランサーでは無いあなたなんか敵じゃない——」

すると、クライヴが起き上がった。

＊＊クライヴ サイド＊＊

「いきなり斧とかねーだろ。一度殺されたからって礼儀をわきまえるよ」

気絶から2分で復帰した俺はそう言った。

「馬鹿な……」

何があっただよ。

「うるとらとらんすいんぱくとおーっ」

俺はやる気の無い声でトランスアタックを繰り出した。

もちろん瞬殺

っていうかやべっ。某液体の臭いが充満してる……。

こういう件で掃除役を任された俺は小1時間一人で拭き続けていたのだった。

＊＊グレン サイド＊＊

俺はグレン。前回ドールの優勝者だ。チャンピオン

そして今は、トランサー窃盗集団の殲滅中。

読者の皆様には見苦しいところを見せてしまった俺だが、
というか自分で言うのもなんだが強さには自信がある。

そして今、

「よし。165体殲滅完了！」
した。

俺の神はへっぽこな最下位レベルの神だ。

ドールへの参加は俺がお願いした。

向こうは俺の正体を知らなかったから、クライヴ（with元俺の
ドラー）に会った時は
すごく驚いていたが気にしない。

前回は逃げで終わったからセーフらしい。

降参はしてないしな

現在3位にはなっているが、1位は168体と差は無い。

「おっと」

ちなみに対トランサー戦であつても原則トランスは使わない。

雑魚だからな。武器も（以下省略）。雑k（省略）。

カットしすg（省略）

ひd（省略）

やm（省略）

…いじめ!?

クライヴ サイド

ようやく拭き終え、神たちと合流し第2地区へと向かう。

そこには”覇者ならず者、死に至る塔”という意味不明な名の塔がある。

ん？何で行くかつて？

そこには俺の師匠がいて、助言もらえないかなと思って。（今回は
真面目だ！）

もちろん塔を作ったのは師匠ではない。

例の空飛ぶ車…というか半飛行機があるので、移動には困らないだろう。

そして俺たちは塔へと向かったが…。

Part 11：グレンの話（後書き）

タイトルはグレンなのに短かったですね、 出番（作者自身のせいだけど）。期待してた人はごめんなさい。

Part 12：キャラ紹介（前書き）

また脱線です。今回はキャラ紹介です。
そして今回は作者視点です。

Part 12：キャラ紹介

―クライヴ―

本名はクライヴ・オルグレン。姓はオルグレン。高校生。ちなみに茶髪で黒眼。これは先天の物で、不良とかヤンキーとかやくずあとか（以下略）気取りではない。114地区生まれ。「全て言われた!!」

―神―

本名、年齢、性別、すべて不明
：嘘です。性別は女。
長髪なこと以外これといって記すことは無い。
「失礼なっ!」

―ディーン―

高校生。黒髪黒眼。
「それだけっ!？」

―アリシア―

女。容姿は中学生に見えるが、実際のところは神とクライヴとディーンと本人しか知らない。
「みんな知ってるじゃん!!」

―グレン―

前回チャンピオン。男。
「だんだん適当だな、作者!」

クライヴ サイド

前から脱線時の文字数不足に苦情殺到（嘘です）のため、茶話会を開くことになった一行。

「何が一行だ。」

え…神様、聞こえてる？

「そりゃ、神だから」

まあいいや。

「そだね」

神様、独り言だと思われるよ…。

「で、どうするのよ」

「帰ろうよ」byアリシア

「面白そうだし」byデイン

「意外だな」byクライヴ

「この世から存在を消せ」by神

「て、それ遠まわしに（禁句です）ていう事だよな？」

絶対しないから。してもいいの？この小説終わるよ？」byクライヴ

「長えよっ！！！！」byアリシア

アリシアが剣を取り出す。

そして俺は絶命した。

アリシア サイド

クライヴやっちゃったし、話を引き継ぎます。

「こつちこそ意外っ！！！！」by神様

「で話題が無いな」byデイン

「じゃあ、魔法っ！」byアリシア

（案外怖いからなこの女）byデイン

「何か言った？」byアリシア

どっつ。

そして絶命2人目——って嘘。気絶ね。

「がーるずとーく！」by神様

「いえーい！」byアリシア

「でどーやって使うの？」byアリシア

「いきなり！？えーと…」by神様

「遅いっ！」byアリシア

犠牲者3人目。まずいかな？

「神を手にかけるだっ！？」by神様

「復帰早ーい！」byアリシア

サイレント
「沈黙」byアリシア

（まさか、あなた最強の戦士！！？）by神様
こうして幕を閉じたのでした。

「じゃダメだろおっ！！」byクライヴ

クライヴ サイド

「じゃあダメだろおっ！！」

何ていう女。トランサーである俺に防御の隙を与えず、あの世に行かせたのは強者の証！！

ここで終わり。

「あのさあ。人の事言えない」by神

Part 12：キャラ紹介（後書き）

どうだったでしょうか。文字数的には本編ではないものは嫌われて
いるかもしれないですが、書かせてください！

今回は埋め合わせの茶話会は台詞が8割だったので、“by”を
末尾に付けて分かりやすくしたつもりです。あと基本的にはクライ
ヴ視点です。

Part 13：師匠の塔から状況報告

塔へはあっけなく着いた。

しかし…天まで伸びるような塔であり、最上階到達へは一週間はかかりそうに思える。

「さあ、行きましょーか！」

神の呑気な声は何もない塔の中に響き、山びこの様に繰り返される。そして足を踏み入れた。

1つの螺旋階段のみが、俺たちの前にあった。

怪物たちに襲われつつも、やっとのことで最上階へ到達した。

しかし人はいなかった。さらに張り紙が。

「なになに？」

アリシアが読む。”最上階までわざわざ来てくれた旅人さんへ。私は最下層にいます、ざまあみろっ！”、そしてこれが内容。

ふざけんやよ……と心の中で呟きつつ、現実では――

螺旋階段を降り直す？しねーよ、飛び降りた。

「とらんすうー」

やる気無いけど敵もいないけどトランスする。

これで着地しても死なないだろ。

神 サイド

「ちよっ！」

アリシアとデインはクライヴのぶっ飛んだ行動に口を開け啞然と、いや愛想を尽かしていました。

まあ、私達は普通に降りていきますが。

クライヴ サイド

すぐ着いた。

「お久しぶりです」

すると明らかに師匠のイメージに合わない男が出てくる。

「クライヴか。大きくなったな」

「**師匠は
老化停止魔法**」
を使うため20代に見える。

能力に関しては、もうチート。ちなみに俺の小学校の先生だ。

ある時は弾丸を弾き飛ばし、

ある時は刀を針金の如く曲げ、

ある時は錬金術を使い……

出来ないことが無いように思えるほど無敵な人だ。

塔を出てしばらく俺たちは歩いていった。

……で、
何で師匠この人が部隊パーティに入ってるの!?

「いや、ね」

”いや、ね”
”じゃないだろ、神様……”

「おっ！トランス反応、トランス反応、トランス反、トランス、ト

ラン、トラ、ト、t、
「

て何体いるんだよ。

すると神は答えた。

「ぞつと、1678体」

また心の声が聞こえてんのか。て、1678体!!!?

「やるか」

師匠！？

「**神超越**」ゴッドトランス

ずばあああああああつ！！！！！！

剣を振り回す師匠が速すぎて青い光の線に見える。

そして、それは一瞬で大量のトランサーを撃退していく。

俺たちは生き残りを殲滅していった。せんめつ

とはいっても雑魚ばかりでアリシアが猛威を振るっているが…。

そして誰かがやってきた。

Part 13：師匠の塔から状況報告（後書き）

1000文字到達が苦しい。

他の作者さんはどうやってあんなにたくさん書いているのだろうか…
とかばやいている作者でした。

Part 14：二人の師匠

「やあ」

「ぐ…グレン！！？」

しかし、師匠だけは冷静。

「さすが、前回優勝者^{チャンピオン}の風格はあるな。だがこの私は倒せない」と、

「師匠、馬鹿な！」

師匠はゴッドトランスを解除した。

「なめられたものだな…フルトランスっ！！！！！！！」

グレンが走る。

虎よりも速く大地を駆け、龍よりも華麗に宙を舞い、鬼よりも強く攻める。

しかし、師匠は格闘技で対抗する。

一瞬の隙を突き、グレンの体力を削っていく。

時にはグレンが某液体を吐くが、師匠は無傷だ。

時間が経つにつれて、戦力差がはつきりしてくる。

「くっ。トランスストップ」

師匠の動きを止め、ポケットから光る石を取り出す。

「これは魔石だ。大体戦うのが目的じゃない。

ぐふっ——」

かなりダメージを負っている様子だ。

「——トランスヒールLV5！全くあいつは何だ、化け物か？

しかもトランスストップが効いていない」

師匠を見る。どうやらかかっているフリをしていたらしい。

「これをお前に」

俺はそれを受け取った。

「何かの役に立つ」

「”何か”って？」

「いずれ分かるよ。では。トランスムープ」

そして帰って行った。

で、さすが師匠。無敵だ。

「買物しないか？最近練成ばかりで」

「練成？」

「物を作る技術だ。まあ、同じ価値の代償がいるが結構使える。例えば…」

”トランスクリエイト”」

山を消し去り、手の上に大量の紙幣を練成する。

「凄い——でも犯罪…」

そして第1地区に向かうことになった。

練成を使いボロ車を最新式に作り変えて走り出した。

「トランサー反応」

「トランスエクスプロージョン」

師匠が素早く反応する。

そして背後で大きな爆発。

トランサー反応が消えたと神が告げる。

やっぱ師匠すげえ。

ちなみに現在地から第1地区までは最新式で1時間はかかる。

距離で言うと30万kmはあるだろう。（嘘だったらごめん）

どんどん車は加速していく。

しかし、前後で大きな爆発が。

明らかに狙われていた。

グレン サイド

俺は”トランスサーチ”という能力でクライヴ達を観察していた。
そしてこの爆発。

急いで俺は現場に向かった。

クライヴ サイド

「トランスムーブ」

グレンが瞬間移動でここに来た。
そして

「トランスストップ！！！！
速く行け！ここは俺が防ぐ！」

定番な流れだな。

師匠がいるのに……

まあ、いいけど。

「頼んだよっ」

ちよっ、師匠！！

というわけでまた進みはじめた。

グレン サイド

「トランスコミュニケーション！」

（師匠、支援を頼めますか？）

そして俺の師匠が答える。

（いいよ。それまで持ちこたえてね）

（頑張ります）

「トランスクリエイト！」

ドラゴンを作り出す。それを^{おとり}にして
時間を稼ぐ。しかし敵が姿を現す。

「いやあ……。邪魔がつ！！トランスエクスプロージョンLV14」
通常LV10が最大だ。つまり14は規格外の性能。

「くっ——」

そして異常な規模の爆発が俺を襲った。

Part 14：二人の師匠（後書き）

グレンの師匠が会話（？）シーンしかありません。

”じゃあタイトルなんだよ”？

毎回の事です、すいません。

Part 15：トランスサーキラー

★グレン サイド★

爆発を間一髪で回避した。

「馬鹿な!!」

敵は驚いたが、それでも俺はあちこちに傷を作り、大半の傷からは某液体が滲み出している。

「さすが、前回の優勝者だ。だが……トランスソード改LV18 ready set」

虹色に輝く7本の剣が先端を外側に向け回転し、やがて止まった。そして7本すべてが俺に向く。

「start」

敵の合図で剣が俺を襲った。

「トランスシールドLV10!!!!!!」

自らの持つ最強の防御魔法で防御するが当然防ぎきれない。

「何者だ……貴様……」

「俺は——」

トランスサーキラー

「選手殺しですよね?」

グレンの師匠が転移して言った。

「そうだ。」

「やっと見つけた……お前は俺が倒す!!」

トランスライフル滅LV20!!!!!!」

「LVは20まであり、無印、改、滅、絶、超……の順に強くなっていく。」

そして俺に”滅”を使うのか。焦っているな?

トランスソード!」

「馬鹿にしているのか!!」

師匠が引き金を引く。しかし全て当たらない。

そして敵は背後に移り、剣を振り下ろした。

師匠は銃で防ぎ、後退する。

「裁け——トランスエクスプロージョン超LV20」

「”超”の最高レベルだとおおおおおおおおっ!!?」

そして師匠は爆発の瞬間、敵と爆発だけを上空に転移させた。

直後、地区1つは軽く潰せる巨大な爆発が上空で発生した。

「トランスヒールLV3」

俺の傷が消えていく。

「悪いな。エネルギー不足だ」

そして師匠は帰って行った。

クライヴ サイド

10分走っていると、遠くの空が爆発していた。

「大丈夫なのか？」

「いいでしょ」

神は平然と答えた。

「……まだ、死んでねえっ!!」

「この声はっ!!」

師匠が横を見る。

最新式のバイクに乗ったさっきの敵が姿を現した。

「倒す!!」

そう敵は言つと、

「トランスエクスプロージョンLV10」

前で大きな爆発が起きた。

ぎりぎり回避したが、いつまでも避けきることはできない。

「トランスソード!!」

俺は攻撃したが、

「トランスシールド。効くとも思ってたのか？」

「罠だよっ!!トランスパニック!!」

「錯乱かあああああ」

バイクと敵は変な方向へ消えていった。

「デーン！」

しかも使用者はまさかのデーンだった。

「これだよ」

そう言つて俺に筒を見せる。

「これはエネルギーをためておける筒だ。これでグレンのをちよつともらつておいたから

使えたんだ。」

「いい物持つてんじゃん」

そして出発から50分が経過している。

第1地区が姿を現し始める。

Part 15: トランサーキラー（後書き）

ペースが厳しくなってきた作者です。

1000文字は大変です…

P a r t 1 6 : 雑談会での異常（前書き）

また短くてすいません。

Part 16：雑談会での異常

アリシア サイド

タイトルは”さんど”ではなく”みたび”ですよっ！

「で、今度は雑談!？」byクライヴ

「問題ある？」by神

「ないよ！」byアリシア

「で、俺の登場機会が少ないのは何故だ」byディーン

「「影が薄いから!」「byクライヴ 神 アリシア

「ひどい」byディーン

「こんにちはあ！」by???

「おっ、グレン！」byクライヴ

「おう。元気か？」byグレン

「帰っていいよ!帰宅」byアリシア

「用事思い出したっ!じゃあな」byグレン

「(アリシアすげえ!)(byクライヴ 神 ディーン

「忘却」byアリシア

「で、話題ある？」byアリシア

「ていうか、お前キャラが定まって無いよな」byクライヴ

「(禁句です)」byアリシア

クライヴ絶命

ディーン サイド

危険なため中止します…

「消えろ」byアリシア

うあああああああ——

Part 16：雑談会での異常（後書き）

このペースでの更新がきつくなってきたので、
完全不定期更新にしていこうと思います。

ご迷惑をおかけするかもしれませんが、よろしくお願いいたします。

Part 17：白と黒

「第1地区か…」

デインが知っているような顔でそう言った。
知らないでしょ？絶対。

しかし…

突然、神様が運転を止めた。

「”白い騎士”が来る…」

神は恐れていた。

「やあ」

静かに現れた”白い騎士”。

トランサーではなさそうだ。

じゃあ…

（止めておけっ！！！！！！！）

神が俺を止める…。

すると、デインが前に出る。

「最強の戦士―白い騎士と、黒い騎士―だよな、

”白い騎士”さん？」

「……黒い騎士かつ！！！！！！」

何その展開っ！！

デイン何者だよ。

「トランス」

えっ！！？

白い騎士がトランスした。

「お前に用は無い、黒い騎士。

俺はクライヴを倒す…」

「トランスっ！！！！！！」

「やる気だな？クライヴ。トランスガン！！！！！！」

しかし全て避けて、俺は蹴りを入れた。

勝った。

て、！！？

よわっ。

雑魚っ。

うそお。

「よせんしゅうりょーっ」

神様はそう言った。

「ここからは本戦っ。選ばれし16人が潰しあいを行います、、

嘘です、1対1の真剣勝負をします。会場へ、れっつごー」

唐突に俺を入れて16人の戦士の戦いが始まった。

無理だあっ！！！！！！！！

Part 17：白と黒（後書き）

こんなに短くて本当に申し訳ありません。
今回から500文字目標でいきます。

Part 18：てきとーな決勝戦

「ディーン、お前は一体何なんだ」

と言っている間に会場に着いた。

「始めるぞ！」

「はあっ！」

「はええよ、お前っ！」

そいつは敗退した。

その直後。

「感心しないぞ！」

剣と剣がぶつかる。

俺も、

「なんてな」

脚を使つてグレンを倒した。

剣を突き付け、

「降参か？」

ああ、恥ずかしい！

「ああ…」

そして最後の一人。

「ていやあああああああああ」

「お前は！」

俺の親友、グレアム。

「しゅばばばば」

…自分で言うのね。

「トランス！、どすっ」

便乗してみた。

すると某液体が出て、臨終に…

「は！！？嘘だろ！？目を覚ましてくれよ！！」

感動（でもない）シーンだが、他人事（ひとこと）じゃない。

「願いを言え」

突如、声が聞こえた。

てか、某有名漫画のパクリじゃんとか言わない。

「こいつを生き返らせろ！！」

「それは無理」

「！！？」

「これ、俺」

「……へ？」

「偽物」

「……」

「悪かった」

「ちくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおお」

こんだけ、馬鹿みたいに文字数使ったんだから気持ちには伝わっただろう。

で、

「お前、神なのか？」

「ああ」

ソッチノホウガオドロキダ！

Part 18：てきとーな決勝戦（後書き）

お待たせして申し訳ありませんでした。（え、待ってない！？）
馬鹿なかけもちとやる気のなさ（サイテーだ）で、進んでいません。
今回は読みにくかったと思いますが、（いつもだろ）
今後ともよろしく願いいたします。

作者より

Part 19：そんな展開で大丈夫か？ 一番いいのを頼む。（前書き）

タイトルからして古いですか？ 木のせいです（誤字でない）
ではどうぞ～

Part 19：そんな展開で大丈夫か？ 一番いいのを頼む。

話は終わったはずなのに、まだ何があるというのか、俺はその場に立ち尽くしていた。

「俺たちが優勝したのか？」

どうやらそのようだ。だが納得がいかない。

皆が弱すぎる。いくらヤツの文章の描写能力が無いに等しいからといっても

あまりにもあっけなさ過ぎる。

自己満足だからといっても同じだ。

その時だった。腹から妙に生暖かいものが溢れ出している。

放っておいたら死ぬだろうな…

「で終わるわけないだろっ！！」

腹に突き刺さっていた剣を抜く。

どこかで、刺さったときに抜いたら出血が酷くなると聞いたが、無視だ。

後ろを振り向くとすでにそこは別の場所と化していた。いや、別の場所だった。

「……。」

言葉なんて出るはずもなかった、俺の後ろに立っていた奴は、、

空想の中にしか存在しないはずの龍だったからだ。

「はあ。」

担いでいた剣を降ろし構える。

龍からは龍独特の圧倒的な威圧感が放出されていた。

「トランス」

しかし発動しない。思い当たる原因といえば、やはりドールの決着が着いたからだろうか？

ただ、なぜ俺は一人なんだ？

試練とでも受け取っておこう、ただし神は後でb o k u s a t u（注、誤字ではない）しておくが。

そして、俺と龍との戦いが始まった。

Part 20：雑魚と強者

なんで俺が龍と戦わねばならん。
このボロ剣で何ができる？

……ボロ剣？

そうか！

「これ最強の剣じゃん!!」

剣を振るい、龍の首を真つ二つに分断――

出来なかった。どころか剣はヒビが入り割れた。

「なんでだよ！」

くそっ！最終手段、ルーンの詠唱だ。

なんてできるはずもなく、。

龍が翼を広げ、空に浮かぶ。

俺はその優雅さとは正反対に、爆風によって無様に吹き飛ばされた。

ああ、武器もなく龍に対抗するなど無謀過ぎる。

一体如何すればいいのだろうか。

「一人で、トランスなしで、だったら何も出来ないのか？ お前は。

」

ああ。

「あっさり肯定するな！」

救世主デイン様がここに参上。

じゃ、任せた。

「お前もやれっ」

剣が投げ渡された。

「3分間だけなら最強になれるから援護頼むわ」

お前はウルトラマンか。

「冗談だよ。じゃ、行くか」

デインは謎に虹色に輝く剣を手に龍に襲いかかる。

俺は渡された爪楊枝ちっさいので援護しつつ、

龍の弱点を分析（とはいってもそんなに大層なものではないが）する。

あれ、そういえばなんでここにディーンが来れるんだ？
その時、俺にはディーンが微かにニヤついたように見えた。

P a r t 2 1 : 終章（前書き）

適當すぎた。
…？

Part 21：終章

ディーンの虹色剣の一撃にて勝負は終わった。
だが…

「何でお前はここに来れたんだ？」

「ふはは。俺はディーンなんかじゃない。」

「何だと!？」

「俺は??????」

溜めすぎだ馬鹿。

「勇者だ」

……へっ？

「ちょっと待て」

どういうことだ？何故そんな奴が助太刀に？

「さあ、行くぞ」

質問に答えるよ！

\$

「よお、クライヴ」

「……え？何この??」

そう、ここは、

「近未来都市っ!!!!!!!!!!!!」

近未来にあるような都市に変わってしまったのだった。

「いや、近未来もなにもお前が消えてから15年経ってるから。
そんなことだろうと思った??思うわけないだろう！

でも、俺強くなった気がする。

「むこうで化け物が暴れているんだが、助っ人いない？」

「じゃ、行ってくる。神様」

「逝ってくるんじゃないのか？」

神様は笑いながらそう言った。

平和な日々が訪れる。これで良かったんだよね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8249r/>

最強の神と、ある意味最強になった一般人の物語

2011年8月11日15時36分発行